

十字架と救い主

ルカ 23:32~38

受難週に入りました。十字架という処刑の残虐さについてはよく語られます。それはむごたらしいものでした。ただ私たち人間は人格的な存在ですから肉体的な痛みだけでなく、心、魂が傷つき、深い痛みを受けることがあります。今日の箇所はイエス・キリストが十字架に架けられた場面ですがどれほどイエス様が肉体も含めた全人格的な痛みと傷を負われて地上の生涯を終えられたのかということを中心に留めたいと思います。

1)人の底無しの罪深さ

十字架の死刑の判決を受けた主イエスはゴルゴダ「どくろ」と呼ばれる処刑場へと引かれていきました。主イエスはそこで十字架につけられたのです。この時、主イエスの他に二人の犯罪人が一緒に十字架につけられ、主イエスの十字架を真ん中に、一人は右に、一人は左に、3本の十字架が並びました。なぜ主イエスの十字架が真ん中だったのかというとそれは主イエスの頭の上に掲げられた「これはユダヤ人の王」という札のゆえでした。この札は主イエスに死刑の判決を下した総督ピラトが掲げさせたものです。ユダヤ人の指導者たちは、イエスをピラトに訴え出る時に、この男は自分がユダヤ人の王だと主張している、と語りました。それを聞いてピラトは主イエスに「お前がユダヤ人の王なのか」(23:3)と問い、主イエスはそれに対して、「あなたがそう言っています」とお答えになりました。これは問いに対する答えにはなっていません。つまり主イエスはこの問いには答えようとなさらなかったのです。それからピラトは訴えてきた人々に、「この人には、訴える理由が何も見つからない」(23:4)と言いました。ピラトは、ユダヤ人の指導者たちが、自分たちの宗教的権威を守るためにイエスを抹殺したいと願い、そのために自分を利用しようとしていることを知っていたのです。利用されたくないピラトは、主イエスを釈放したいと思っていましたが、しかし指導者たちのみならず民衆までもがイエスを十字架につけると叫び、要求したので、彼らを満足させるために死刑の判決を下さざるを得ませんでした。面白くないピラトはその腹いせに、主イエスの十字架に「これはユダヤ人の王」正確には「ナザレ人イエスはユダヤ人の王」という札を掲げさせたのです。ヨハネ 19:20にはこの札はヘブル語、ラテン語、ギリシャ語で書かれたとありますからすべての人がそれを読めるように意図してピラトは掲げさせたのです。ですから、これはピラトの、主イエスに対してと言うよりもユダヤ人たちに対する皮肉であり、侮辱なのです。ヨハネ 19:21には、ユダヤ人の祭司長たちが、この札を「この者はユダヤ人の王と自称した」と書き換えてくれるように求めたけれども、ピラトは頑としてそれを拒みました。ピラトはユダヤ人に対する否定的な思いがありましたからユダヤ人の王はその民の要求によってぶざまにも十字架につけられた、という演出にこだわったのです。つまりユダヤ人に大恥をかかせたかったのです。そしてその演出の一環として、他の二人の犯罪人を左右に、あたかも王であるイエスが左右に従えている家来のように配置して十字架につけたのです。これはピラトのユダヤ人たちへのあてこすりですが、同時に主イエスに対する侮辱ともなります。この場面を見た人は誰も、イエスの十字架だけは他の二人とは違って罪なくして処刑されているのだ、などとは思いません。むしろ、この中で一番悪いのは真ん中のイエスだ、イエスこそ罪人たちの王様なのだと思いが、あえてそういう配置で主イエスは十字架につけられたのです。

34節の後半には、「彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。」とあります。十字架につけられる人は服をはぎ取られ、それは死刑執行人たちの役得となりました。「彼ら」とは十字架刑を執行したローマの兵士たちです。そしてこのことは、今日交読した詩篇 22篇 18節の「彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。」が実現したということです。35節には、「民衆は立って眺めていた。」とあります。その「民衆」とは主イエスを十字架につけることをピラトに要求した人々です。彼らが主イエスの十字架を見つめていたのは、決して同情や憐れみの思いをもってではありません。むしろ憎しみと嘲りの目で見つめていたのです。だからその次に、「議員たちもあざ笑って言った。」と続いています。議員たちが、主イエスをピラトに訴えました。ついにイエスに勝利し、十字架につけて殺すことができる、

その喜びをもって彼らは主イエスをあざ笑ったのです。彼らが言ったのは「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」ということでした。さらに36節には、十字架刑を執行している兵士たちが「酸いぶどう酒」を主イエスに差し出したとあります。このぶどう酒は、本来は処刑される者の痛みを少し緩和する目的で出されるものですが、ここでは兵士たちも民衆や議員たちと一緒に主イエスを侮辱するために用いたと語られています。彼らも「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ったのです。この兵士たちの嘲りの言葉は、主イエスの頭の上に掲げられていたあの札から来ています。ピラトの命令で「これはユダヤ人の王」という札を掲げた兵士たちが、それをネタに主イエスを嘲ったのです。つまりこの箇所でも語られていることは、主イエスが犯罪人たちのまん中で、その親玉のようにして十字架につけられ、その下では兵士たちがはぎ取った服をくじで分け合い、民衆たちは憎しみの目で見つめ、議員たちは「お前は神からのメシアだろ！ 神に選ばれた者ではなかったのか」とあざ笑い、兵士たちは「ユダヤ人の王なら王様らしい力を見せてみる」と嘲った、ということです。以上のように肉体的に残酷なめにあっていることに加えて、主イエスは、これでもかといわんばかりに徹底的に辱められ、侮辱されたのです。

議員たちは、「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」と言いました。彼らは、主イエスが多くの病人を癒し、悪霊にとりつかれていた人から悪霊を追い出し、死んだ人を生き返らせることまでして、苦しみ悲しみの中にある人々を救ったことを認めて、とりあげています。そのように人々を救う力のある神からのメシア、つまりキリスト、救い主だったら、自分をこの十字架の苦しみと死から救ったらよいではないか、ということです。それができないということは、お前は神からのメシアでも、選ばれた者でもないということだと彼らは言っているのです。また兵士たちは、「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言いました。本当の王様なら、なぜぶざまに十字架につけられるのか、つまりお前は王でも何でもない大ぼら吹きだということです。この二つの嘲りの言葉には共通点があります。それは「自分を救え」ということです。「自分を救うことのできないお前はニセモノだ」ということです。このこともまた、詩篇22:7,8にこうあります。「私を見る者はみな私を嘲ります。口をとがらせ頭を振ります。『主に身を任せよ。助け出してもらえばよい。主に救い出してもらえ。彼のお気に入りなのだから。』」。主なる神様に愛され、選ばれ、遣わされた者なら、その主に頼んで救ってもらえるはずだ、そういうことが起らないのは、お前は主に愛されてはいなかったのだ、自分が神に愛され、選ばれ、遣わされていると思ったのはお前の思い込み、幻想に過ぎなかったのだ、とされているのです。

2)キリストの底無しの愛

主イエスは十字架につけられて殺されました。十字架は本来は、とても残酷な死刑の道具です。極悪人が見せしめのために殺されるためのものです。主イエスはそういう極悪人の一人として見られ、十字架の死刑に処せられたのです。鞭で打たれ、十字架を担いで運ばされ、服をはぎ取られ、手足に釘を打たれてぶら下げられ、その苦痛の中で死んだのです。そこには何の救いも感じられません。神の愛とか、守りとか、恵みなどというものが一切失われた現実がそこにはあります。確かに人を救うためには、救うことのできる力が必要です。王であるというからには、人を従わせるだけの力が必要です。王たる者が捕えられ、裁かれ、死刑に処せられてしまうようでは、王ではあり得ないのです。だからお前は救い主でも王でもない、という彼らの嘲りはある面、当たっています。主イエスを信じる信仰に生きようとする私たちも、このようなイエスを救い主だとか王だとか信じるのはお前の思い込み、幻想に過ぎない、イエスにそんな期待を抱くと必ず裏切られるぞ、という嘲りやののしりを受けるのです。お前の信じている神は何をしているのか、このように人々が苦しみ、死んでいるという事態のどこに、神の救いがあるのか、神が本当に神であると言うなら、力を見せてみる、苦しむ人々を救ってみせろ、それができないなら、救いだとか恵

みだとか偉そうに言うな…、そういう思いが今人々の心の中にうず巻いているし、そういう嘲り、ののしりによって心打ちひしがれている人もいます。十字架につけられた主イエスを嘲り、ののしった声は、今私たちの周囲にも溢れています。人間の歩みには、様々な苦しみ悲しみ困難があります。中には、なぜ自分がこのような苦しみ悲しみを味わわなければならないのか、その理由が全くわからないような理不尽なものもあります。このような嘲り、ののしりを受けたことは、主イエスにとって、手足を釘打たれる肉体の苦痛に勝る苦しみだったと思います。「わが神わが神どうして私をお見捨てになったのですか。」という叫びは主イエスのその苦しみから発せられた言葉です。しかしこの福音書を書いたルカはむしろ、主イエスが黙ってその嘲り、ののしりに耐えておられるお姿を語っています。その忍耐の中で主イエスがお語りになった一言が34節です。「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。』」。十字架につけられた肉体的苦しみの中で、また徹底的に侮辱され、嘲られ、ののしられる中で、自分を十字架につけた人々への赦しを、主イエスは父なる神様に祈ったのです。主イエスを十字架につけて殺し、抹殺しようとしている、そこにおいて、自分を救う力のないお前は救い主でも王でもないとののしっている人々、それら全ての人々の罪の赦しを、主イエスは祈り願われたのです。

彼らは何を知らなかったのでしょうか。それは、父なる神の独り子であられる主イエスが、神に背き逆らい、神を神として敬わず、従わず、自分の思いによって歩もうとしている私たちの罪を全て背負って、引き受けて、十字架にかかって下さったということです。十字架の死刑を受けなければならない罪人は本当は私たちであるのに、その私たちの身代わりとなって主イエスが十字架につけられたのです。つまり私の罪がイエスを十字架につけ、イエスの十字架上の壮絶な痛みと苦しみは私の罪の罰を代わりに受けて下さっているということです。主イエスは、これまで数々の奇跡を行い、病人を癒し、悪霊を追い出し、死者を復活させることすらもなさいました。しかしこの期に及んで主イエスも、父なる神様も、それをしようとはされずに、主イエスが十字架につけられ、徹底的に侮辱され、嘲りとののしりを受け、えん罪にもかわらず誤解されまま死ぬことを選びとって下さったのです。それは全て、私たちのため、私たちの罪が赦され、神様の祝福を受けて生きる神の子とされるためでした。私たちは自分が犯す罪の中で、また人々の罪の中で、様々な苦しみ悲しみに陥ります。自分が人を傷つけ、人間関係を破壊してしまう、とりかえしのつかない罪を犯してしまうことがあります。また人のそういう罪のために苦しみ、傷つき、赦せないという思い、憎しみを抱き、そこからどうしても抜け出せないということもあります。神様をも、人をも、愛そう、愛したい、愛さなければと思いつつながら、それができないという現実絶望を覚えます。それらの出来事の中で、いったい神様の救いなどどこにあるのか、神が私たちを愛しておられ、恵みを与え、守り導いて下さると言うけれども、そんな愛や恵みや守りはどこにも見えないではないか、と思うことがあります。主イエスの十字架は、まさにそのような、救いも助けも恵みも愛も見当たらない現実のただ中に、神様の独り子が身を置き、その苦しみ悲しみ絶望を自分の身に背負い、引き受けて下さったという出来事なのです。主イエスがこのように十字架にかかり、自分を救うことができずに殺されてしまう、その苦しみと死を味わって下さったからこそ、私たちがそのような救いの見えない苦しみの中で絶望を覚える時にも、そこに、十字架につけられた主イエス・キリストが共にいて下さるのです。

私たちは、十字架の死によって私たちの罪を全て赦し、苦しみや悲しみを共に担って下さる神様の独り子イエス・キリストをまことの王としていただき、その王の下で、その恵みを喜び、感謝しつつ、キリストの父である神様を礼拝し、ほめたたえつつ生きていくのです。